

【『琅』四十五号・あとがき】

我が意を得たり！二題

☆一度、京都郊外、大阪との府境に近い石清水八幡宮に行つてみたいと思つていた。その訳については後述するが、この春、その望みが叶つた。八幡宮は、小高い丘の頂きにあり、近くの展望台からは、眼下で合流する桂川・宇治川・木津川を隔てて京都の街が遠望出来る。その展望台の一面に谷崎潤一郎文学碑が置かれ、碑文には「蘆刈」の一節が彫られていた。

「蘆刈」のどの部分が引用されているのか知りたくて読んでみた。そして、碑文とは別の、興味深い一節に出会つた。それは、八幡宮とは川を隔てて対岸にある水無瀬神宮を訪れた主人公が、川の堤防に上がり、何の変哲もない、平凡な風景を見て述懐するくだりである。

「なべて自然の風物といふものは見る人のこのころごろであるからこんなところは一顧のねうちもないやうに感ずる者もあるであらう。けれど私は雄大でも奇抜でもないかう云う凡山凡水に対する方がかへつて甘い空想に誘はれたいつまでそこに立ちつくしていたいやうな気持ちにさせられる。かういふけしきは眼をおどろかしたり魂を奪つたりしない代わりに入なつこいほほゑみをうかべて旅人を迎え入れようとする。」

テレビの旅番組で、「これが絶景です！」と絶叫するのを耳にするたび、「絶景かどうかはこちらが決めることでしよう・・・」と、ぼやき続けて来たので、谷崎のこの文章には、溜飲の下がる思いがしたのである。

☆定年退職後に始めたフランス語の再学習で、最近の語学教育がすっかり様変わりしたことに直面し、取り上げたことがある（第三十三号）。それは、語学教育の世界的な傾向らしく、一言で云えば実学指向ということになるのだろう。読めても日常生活ではたいして役に立たない文学作品

よりは、外国人と話が出来ることや海外旅行で困らないようにとの思いからなのだろう、町中の標示やポスター、週刊誌やウェブサイトの切り貼りなど、何の味もないような教材のオンパレードなのである。しかし、私は、手元の古い仏語参考書にある「原文の表現しようとする思想や感情を、できるかぎりの確に感得し把握する能力を養うこと」こそ、語学学習の基本と考えてきたので、そうした最近の方向性に多々疑問を感じていたのである。

そうしたなか、我が意を強くする記事に接した（四月十二日朝日新聞）。大学の仏語教師であった内田樹氏が、学生を連れて彼の地に語学研修に行った際、テレビのお笑い番組を聞き取る課題が出され、「興味ないからやらない、僕がフランス語を学ぶのは、文学や哲学の研究のために、コメディアンが早口言葉を聴き取るためじゃない」と言つたら、現地の先生が大変怒つたとのことだった。私が以前通つていた語学学校の教科書にも、お笑い芸人のやり取りを扱った教材があり、こんな駄洒落を学びたくてフランス語を学んでいるのではない！と思つたことを思い出した次第である。

☆ところで、なぜ石清水八幡に行きたかつたのかというと、昔、「徒然草」で「仁和寺にある法師」を読んだからである。八幡宮に詣でた法師が、大勢の人が山に登つて行くのを見て、彼らはなぜ山に登つて行くのか。自分はお参りが目的だったので山には登らないで帰つて来た、という話で、「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり」というのがオチだった。

ところで、この法師は山上の八幡宮でないとするれば、どこにお参りしたのだろう。駅の周囲を見渡してもそれらしい所は見当たらず、私にも先達が「あらまほしき」と思つた次第である。

（茂治）